セーフティネット医療

※結核、重症心身障がい、筋ジストロフィーを含む神経・筋難病など他の医療機関では体制の整備、経験、または不採算とされることからアプローチが困難な分野の医療

AIDS/HIV 総合治療センターのスタッフによる定期カンファレンス

その人らしく地域で暮らせる社会の実現を目指して

～九州医療センターの AIDS/HIV 総合治療センター～

ブロック拠点病院として チーム力で患者を支援

かつては死の病というイメージが強かったエイズ（AIDS：後天性免疫不全症候群）ですが、今では確実な医療が提供できるようになっています。エイズの原因となるHIV（ヒト免疫不全ウイルス）に感染したとしても、1日1回1錠の抗 HIV剤を服用すれば、エイズの発症をほぼ完全に阻止できるのです。ただ、HIV感染は慢性疾患なので、一生付き合っていく必要があります。

エイズ治療の中核となるブロック拠点病院は全国に8病院あります。そのうち、NHOは「仙台医療センター（仙台市）」「名古屋医療センター（名古屋市）」「大阪医療センター（大阪市）」「九州医療センター（福岡市）」の4病院が指定されています。

今回は九州ブロック（沖縄を含む）の中核となり、エイズ治療に取り組む九州医療センターにお話を伺いました。九州医療センター（福岡市）の AIDS/HIV 総合治療センター（以下、総合治療センター）では、医師や看護師をはじめ、薬剤師・臨床心理士・医療社会事業専門員（MSW：医療ソーシャルワーカー）・管理栄養士などがチームを組み、患者さんを支援しています。

正しい理解の促進も センターの役割

九州医療センターでは地域の医療機関や福祉施設と連携し、患者さんが社会・福祉制度を利用できるよう、地域全体でセーフティネットを構築することに力を入れています。

一言で HIV 患者さんといっても、新たに HIV に感染した患者さんや、薬害で HIV に感染（主に 1980 年代）した患者さんもいます。特に後者の患者さんは、高齢化が進み、治療以外にも介護やリハビリテーションなどが必要になっています。山本政弘医師（総合治療センター部長）は、こうした患者さんの問題は報道されることがほとんどなく、地域で孤立しがちだといいます。「だからこそ、他の医療機関や福祉施設とセーフティネットの構築が必要です」と山本医師は語ります。

しかし、その際に大きな障害となるのが、HIVに対する理解不足です。理解不足が原因で診療や介護のサービスを受けられないといったことが起こらないよう、HIVに対する正しい理解の促進を図ることも、総合治療センターの大きな役割なのです。

◀「九州は中央部に山地があり交通手段も少ないので、患者さんが分散しています。そのため、当院以外のどのエイズ拠点病院でも、重症化した患者さんに対応できるよう体制を確立しています」と語る山本医師（右）

辻麻理子臨床心理士（左）は「ささいな情報も共有し、チーム一丸となって患者さんを支える体制がここにはあります」と笑顔で話してくれた

◀総合治療センター内の専用の診察室。他の診療科の診察室と見た目は変わらないが、防音室になっている。また、診察室への通路は入口と出口が別になっており、患者さん同士でも顔を合わせないように、プライバシーへの配慮がなされている

▲「高度なプライバシーへの配慮が必要で、患者さんの思いを各方面へ代弁することも責務のひとつです」と話す首藤美奈子医療社会事業専門員

災害時にも力を発揮した 地域連携の網の目

「患者さんへの支援とは、地域連携です」と山本医師は表現します。総合治療センターは、九州ブロックにある 30 のエイズ治療拠点病院と緊密なネットワークを構築しているだけでなく、日頃から各拠点病院間の医師・看護師・臨床心理士・薬剤師・MSW のそれぞれが、同職種で情報交換をしており、より細かい網の目を形成しています。その効果は災害時にも発揮され、現に、熊本地震（2016 年）が発生した際は、ある患者さんが阿蘇地方で孤立したのですが、このネットワークのおかげで、無事に治療が継続できたといいます。

患者さんが住み慣れた場所でその人らしく暮らせる社会を実現するため、HIV に対する理解促進に取り組み、地域のセーフティネットを支えています。

九州医療センター（福岡県福岡市） 許可病床数 702 床

九州全域を診療圏とする高度総合診療施設。エイズ九州ブロック拠点病院をはじめ、地域医療支援病院、地域がん診療連携拠点病院、地域周産期母子医療センター、臨床研修センターなど、さまざまな機能を併せ持つ。